日本被団協のノーベル平和賞受賞に際してのメッセージ

2024年10月15日

京都原水爆被災者懇談会　世話人代表　花垣ルミ
京都「被爆二世・三世の会」　世話人代表　平　信行

2024年ノーベル平和賞が日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）に贈られることになりました。心からお祝いを申し上げ、また喜びを共にするものです。

今回のノーベル平和賞授与は、日本被団協のみなさんのみならず、その創立に至る前史から、被害者救済と核廃絶を訴えてこられたすべての核被害者のみなさんに対する、間もなく80年に及ぶ闘いの歴史への賞賛と世界の人々からの感謝のメッセージです。

戦後世界は核保有国と核の傘のもとにある国々による歪められた「核世界」観によって覆われてきました。人間に対する放射能の影響評価は隠ぺいとねつ造を極め、差別と偏見を助長し、人々を苦難に陥れ、救済の道を閉ざしてきました。とくに日本政府はこの隠ぺいとねつ造の動きに加担し続け、被爆者へのさまざまな迫害を繰り返して来ました。原爆症認定を何度も拒否し、黒い雨被爆者を長い間放置し続け、さらに長崎の被爆者を「被爆体験者」などと名指して援護施策を拒否するなど、枚挙にいとまがありません。被爆二世・三世の苦しみに対しても放置を続けています。

これに対して日本被団協と被爆者運動は、幾多の困難を乗り越えながら、自らが被爆者であることを名乗り上げ、その辛く悲しい体験を赤裸々に語り、また著し、被爆の実相を、核兵器の非人道性を、世界に明らかにしてきました。これに続く被爆二世・三世の運動も力強い歩みを進めています。

被爆者の訴えは世界の人々に届き、核兵器の非人道性を共通のものとする上で力強い役割を果たし、2017年核兵器禁止条約の採択に結実しました。今、核兵器禁止条約は批准国が73か国、署名国が95となり、条約参加は国連加盟国のほぼ半分にまで至ろうとしています。

世界の核廃絶運動前進の一方で、核兵器使用の危機が、逆流ともいえる動きとしてかってなく高まっています。ロシアなどによる核使用の威嚇発言が繰り返され、対抗する NATO 軍事ブロックなどの核配備と態勢が強化され、核の近代化、小型化の名のもとに新たな核開発が推し進められています。国際紛争と緊張関係の根源に核兵器の存在が顕著となっています。東西冷戦以降最大、最悪の危機的状況にあります。

世界を危機から救うのは決して「核抑止力」などではなく、核兵器廃絶そのものです。日本被団協へのノーベル平和賞受賞は、あらためてそのことを強烈に指し示す世界へのメッセージでもあります。

またそれは「放射線被曝の実相を隠ぺいするな」「世界の核被害犠牲者を救え」という声につながるものでもあります。

日本被団協と被爆者のみなさんに、これからもお元気で、世界の核廃絶運動のためにご活躍いただくことを願うものです。私たちもあらためて核廃絶と核被害者救済の運動に力を尽くしてくことを誓います。